

【パネルディスカッション報告】

台湾文学研究、この10年、これからの10年

星名 宏修

はじめに

- 第1節 「静かな革命」
- 第2節 日本における「前史」
- 第3節 台湾文学関連の学術会議
- 第4節 基本史料の出版と電子化
- 第5節 国家台湾文学館
- 第6節 これからの10年？

(要約)

1990年代以降の台湾で、台湾文学研究は「顕学」と称されるほど注目を集める学問領域へと成長した。戒厳令が解除された後も、90年代の半ばまで、「古典偏重で現代には重きを置かず、中国があるばかりで台湾はないという異常な状態」¹が継続していた台湾の学术界に、いったい何がおこったのだろうか。

本稿は、日本台湾学会第10回大会の《10周年記念シンポジウム》で行った報告をベースとして、1998年から2008年までの10年間に、日本と台湾ではどのように台湾文学研究が進展してきたのかを、いくつかの側面から検討したものである。

はじめに

日本台湾学会の創立大会が開催されたのは、10年前の1998年5月30日のこと。

この10年の間に、台湾と日本の社会はともに大きく変わり、台湾研究も大きな進展を見せた。私に与えられた課題は、この10年間の台湾文学研究の動向を総括するとともに、今後の10年を展望する、などという、とてつもなく無謀なものだ。

社会的にも研究面でも大きな変化の起きたこの10年間に、私は東京や関西など、台湾に関連する研究会やシンポジウムが日常的に開催され、様々な情報が行き交う研究環境からは遠く離れた沖縄で過ごしてきた。さらに私の研究対象は、日本植民地期に限定されており、古典文学や戦後の文学に関する研究動向については、全く言及できない。「台湾文学研究、この10年、これからの10年」という大きなタイトルには釣りあわない、限定的な内容であることを、あらかじめ弁明しておく。

第1節 「静かな革命」

台湾の『文訊』雑誌2007年11月号は「台湾人文学問的發展方向」と題する特集を組んでいる。この特集では台湾における台湾人文学関連の学部・研究科の現状と今後の方向性について、それぞれの研究機関の責任者が報告を行っている。また呉文星（台湾師範大学）の「談台湾文史語言

系所之現況與改進之道」や黄美娥（台湾大学）の「台湾文学学科知識的边界在哪里？」などの文章は、今回の原稿を執筆する上で大いに参考になった。

黄美娥は、1990年代後期以降、各地の大学で台湾文学を専攻する学部や研究所が設置された一連の流れを、「静かな革命（寧靜革命）」²とよんでいる。

現在の真理大学の前身である淡水学院に、台湾初の台湾文学系が設置されたのは、わずか11年前の1997年のことだった。そして2000年には成功大学の台湾文学研究所（碩士班）が、その2年後の2002年には、博士班がつくられたのである。

それ以後の「革命」的な発展ぶりは、呉文星の「談台湾文史語言系所之現況與改進之道」が明らかにしている通りだ。同文によれば、2007年秋の時点で、台湾各地の大学で台湾文学・言語・文化・歴史などを専攻する学部と大学院は、全部で23箇所到達するという。そのうち「文学言語」などに関するものが（台湾文学研究所など）17箇所、「歴史文化」関連のものが6箇所³であることを考えると、「台湾学」の「顯学」ぶりを牽引しているのが「文学言語」分野であることが理解できるだろう。

第2節 日本における「前史」

「この10年」、つまり1998年以降の台湾文学研究について紹介するのが本報告の目的であるが、その「前史」についても簡単に触れておく必要があるだろう⁴。

日本における台湾文学の研究史を考察するには、まずは下村作次郎が編集した「戦後日本における台湾文学関係研究文献目録」⁵を繙かなければならない。1948年から1999年までに刊行された、翻訳を含む単行本や研究論文を網羅したこの目録を眺めると、1970年代の終わりごろが、研究史の上で大きな転換点になっていることが分かる。

戴國輝を中心とする東京の研究者によって、台湾近現代史研究会の機関誌『台湾近現代研究』が創刊されたのが1978年。この雑誌には文学の領域に限定しても、河原功による楊逵研究だけでなく張文環・龍瑛宗の回想録など、今日もなお重要な研究成果が掲載されたことは周知の通りだ。

ほぼ同じころ、関西では台湾文学研究会が結成（1981年）された。機関誌『台湾文学研究会報』は1980年代から90年代にかけて、台湾文学に関する研究成果を発表する数少ない場としての役割を果たした。また同研究会のメンバーが中心となって、1991年に「天理台湾研究会」が結成され、95年に「天理台湾学会」と名称を改めた後も、毎年1回ずつ研究大会を開催している。

東京と関西のそれぞれの地域で、台湾文学研究が軌道に乗りだしたころ、中国でも新たな動きが始まっていた。1979年に米中の国交が樹立し、全人代委員長の葉劍英が、台湾側に「三通」を呼びかけた。この年に、中国では聶華苓や白先勇の作品が紹介され、台湾文学研究がようやくスタートしたのである。

第3節 台湾文学関連の学術会議

1987年7月に戒厳令が解除され、民主化と台湾化が同時進行する台湾社会で、台湾に関わる学問が注目されるようになっていくのは、文学研究の領域だけではないだろう。その意味で90年代の前半は、「静かな革命」（黄美娥）の機運が徐々に高まっていく時期であった。

1994年11月に、新竹の清華大学で開催された「頼和及其同時代的作家－日拠時期台湾文学国際学術会議」は、70年代以降、東京と関西で研究を行っていた日本の台湾文学研究者の多くが顔を揃えたということによって、それ以後の研究の連携に大きな影響を与えた。だが、この会議が台湾の学界に与えたインパクトは、更に大きなものであっただろう。

「古典偏重で現代には重きを置かず、中国があるばかりで台湾はないという異常な状態」⁶が、戒厳令解除後も継続していた台湾の学界（とりわけ中国文学研究の「場」）において、植民地時代の台湾文学に焦点をあてた39本もの論文が、台湾だけではなく日本・アメリカ・ドイツから寄せられたのである。その一部は、学術会議の終了後に、『よみがえる台湾文学 日本統治期の作家と作品』としてまとめられた。また会議最終日の「日拠時期台湾作家座談会」には、戦後の台湾文壇から姿を消していた周金波も含めて、植民地時代に活躍した9人の作家が集まったことも忘れられない。戦後50年近くの時間が流れ、すでに高齢に達している文学者たちが一堂に会した、貴重な機会であった。

ここで付記しておきたいのは、学術会議の準備段階で、主催者は中国の研究者にも参加を呼びかけたものの、「招請状をそのまま返送してきたり、返事がなかったり、またある人は参加はしたいが、中国当局が「国際」という名称を冠する台湾でのすべての会議を認めておらず参加が許されない、とのことで中国からの参加者がなかった」⁷ということである。今日の台湾海峡を跨いだ学術交流の盛況ぶりを考えると、この10数年間の変化の大きさに、隔世の感を禁じ得ない。

上述した清華大学の会議は規模が大きく、しかも日本植民地時代の台湾文学に焦点を当てたという点でも画期的なものだったが、これ以降台湾文学をテーマとした数多くの学術会議が台湾で開かれるようになった。ここでは「この10年」の最初の年、つまり1998年にスタートした、5年間に及ぶ「近代日本と台湾」シンポジウムについて触れておきたい。

日本側では、日本社会文学会と植民地文化研究会（現在は、植民地文化学会と改称）が関わったこのシンポジウムは、1998年から2003年まで5回にわたって、日本と台湾で開催された。とりわけ1998年12月の第1回は、「《皇民化》と日台文学」をテーマとし、大きな反響を引き起こした。会議の参加者が激しい論戦を繰り広げ、日本統治期末期の「皇民化」と「皇民文学」が、今日でも台湾文学研究における一つの焦点となっていることを浮き彫りにしたのである⁸。

会議が紛糾した一因として、大東亜戦争期に台湾人が日本語で執筆した作品が、同年2月に張良沢によって中国語に翻訳され、台湾の新聞紙上に掲載されていたことが挙げられる。この翻訳をきっかけとして、台湾においては「皇民文学」に関する論争がすでに始まっていたのである。従来、台湾で「皇民作家」と見なされてきたのは、周金波と陳火泉のふたりにすぎず、王昶雄の

「奔流」がときおり言及される程度であった。だが、実際には、彼ら以外にも多くの作家が、大東亜戦争を賛美する「皇民文学」に手を染めたのだと、当時の作品の翻訳を通して張良沢は主張したのである。

張良沢の見解に対して、陳映真ら『人間』グループが、強烈な批判を行った⁹。「《皇民化》と日台文学」シンポジウムは、このような背景のもとで開催されたのである。

白熱した論争ぶりからうかがえるように、「皇民文学」とは戦後半世紀を過ぎた今もなお、個々の作品や作家の評価に止まらず、日本の植民地支配をどのように考えるのか、あるいは今日的な統独問題ともリンクする、極めて敏感な問題として存在しているのである。

だが、かつての宗主国であった日本の研究者はこの問題にどのように取り組んできたのだろうか。シンポジウムが開催された1998年までに、尾崎秀樹のような先駆者を除いて、日本の未完の脱帝国化の問題として「皇民文学」を論じようとしてきただろうか。この点についてはこの報告の最後にもう一度触れるが、これからの日本における台湾文学研究を考えるにあたって、とても重要な問題だと私は考えている。

この10年間に開催された、台湾文学を主題とする数多くの学術会議を列挙するのは不可能であるし、報告の趣旨にも合わないだろう。ただ今日の台湾文学研究のありようを考える上で、2005年に成功大学台湾文学系が主催した「跨領域的台湾文学研究学術研討会」についてだけは、簡単ではあるが言及しておきたい。

台湾文学研究が「顕学」となったことはすでに述べた通りだが、急激にポストを増やした台湾文学系・研究所で教員となったのは、中文系や歴史系出身の研究者だけでなく、それ以外の学問領域－外文系・日文系・社会系・メディア系など－を専攻していた研究者も数多く含まれていた。黄美娥はこうした現状を指して、台湾文学研究において「跨領域」という方法論が、すでに実践されていると述べている¹⁰。

上述した学術会議は、台湾におけるこうした状況を踏まえながら、社会学や心理学など他領域の研究者の参加によって、学問領域を横断（「跨領域」）した対話を目指したものだ。会議の冒頭で「跨領域的研究與実践－概念分析與一点個人経験」と題する基調講演を行ったのは、近代台湾の医療やジェンダーを研究対象とする傅大為である。

黄美娥の言う通り、台湾文学系の出身者だけでは、急速に拡張した現在の台湾文学系・研究所の教育を担うことができないという意味で、「跨領域」は「強いられた」側面があることも、現状においては否定はできない。だが、台湾における台湾文学研究の大きな魅力の根底には、領域横断的な研究の持つ「強み」があるのではないだろうか¹¹。会議の成果としてまとめられた大部の論文集¹²を読みながら、私はそう考えている。

第4節 基本史料の出版と電子化

『文訊』雑誌の「台湾人文学問的發展方向」特集で、清華大学の陳萬益は、1997年以後の台湾

文学研究にとって最も重要かつ大きな成果として、史料の発掘・整理と出版を挙げている¹³。

私が大学院生だった1980年代の後半に、植民地時代の文学を研究しようと思っても、手に入る刊行物といえば、東方文化書局の『新文学雑誌叢刊』（1981年）や、李南衡編集『日抛下台湾新文学（明集）』（1979年）、鍾肇政と葉石涛が編集した『光復前台湾文学全集』（1979～82年）ぐらいのものだったのではないだろうか。

台湾において台湾研究が「顕学」となった「この10年」は、日本においては、戦後50年も過ぎ、ようやく植民地（文学）研究が注目され始めた時期であった。こうした学問的「流行」も追い風としながら、台湾（文学）研究に関する基礎的な資料の復刻が、日本と台湾の双方で進展している。

まずは、植民地時代の重要な雑誌である『民俗台湾』（1998年）、『旬刊台新』（1999年）、『風月・風月報・南方・南方詩集』（2001年）、『新建設』（2005）などの復刻版が相次いで刊行されたことが重要だ。

文学分野に限定しても、緑蔭書房から『日本統治期台湾文学日本人作家作品集』（6巻、1998年）、『日本統治期台湾文学台湾人作家作品集』（6巻、1999年）、『日本統治期台湾文学文芸評論集』（5巻、2001年）、『日本統治期台湾文学集成』（30巻、2002～2007年）が出版されたことの意義は大きい。また、ゆまに書房からも『日本植民地文学精選集』が2期（計47巻、2000～2001年）にわたって刊行され、その中には台湾文学関係の作品が、14冊含まれている。これまで入手が困難であった作品が復刻版として刊行されたことで、研究の可能性が格段に向上したことは言うまでもない。

台湾に目を転じて、各地の文化センターの活潑な出版活動や、2003年に国家台湾文学館が設立されたことに伴い、文学者の著作の整理・刊行が相次いでいる。主なものだけ挙げてみても、『張深切全集』（12巻、1998年）、『楊遠全集』（14巻、2001年）、『王昶雄全集』（11巻、2002年）、『張文環全集』（8巻、2002年）、『呂赫若日記』（2巻、2004年）、『龍瑛宗全集・中文版』（8巻、2006年）、『龍瑛宗全集・日文版』（6巻、2008年）などがある。2007年には『吳新榮日記全集』の刊行も始まった。

雑誌の復刻や作品集の出版とならんで台湾（文学）研究にとって画期的だったのは、『台湾時報』や『台湾日日新報』が電子媒体として利用可能になったことだろう。1997年には、総目録と著者名索引からなる『『台湾時報』総目録』が緑蔭書房から刊行されていたが¹⁴、翌98年に雑誌本体が電子化されたことで、利便性は格段に向上した。

また植民地時代の研究にとって最も重要な文献である『台湾日日新報』も、復刻版やマイクロフィルムはすでに出版されていたが、電子媒体の出現によって、任意のキーワードでの検索が可能になった。

これまで述べた雑誌の復刻や作品集の刊行、電子媒体化は、わずか10年の間に一挙に進行したのである。こうした基本史料の復刻や電子化は、今後もさらに進むであろうし、これからの台湾（文学）研究のあり方を根本から変えていくのは間違いないだろう。

第5節 国家台湾文学館

2003年10月、国家台湾文学館が台南にオープンした。1991年に文化建設委員会が「現代文学資料館」の設立計画を立ててから完成までは12年もかかったが、多くの文学者から貴重な蔵書の寄贈を受け、今後の台湾文学研究の拠点となることが期待されている。

1997年に文訊雑誌社の主催によって始まり、若手研究者の成果を発表する場となった「青年文学会議」にも、台湾文学館は共催団体として名を連ねている。それ以外にも、多くの学会議を開催するほか、研究誌『台湾文学研究学報』を刊行するなど台湾文学研究の進展に重要な役割を發揮している。

また、研究者だけではなく、より幅広い文学愛好者を参加者として想定した「週末文学対談」や、『台湾文学館通訊』の刊行など、台湾文学研究の裾野を拡げる啓蒙的な活動にも熱心に取り組んでいる。

第6節 これからの10年？

ここまでいくつかの切り口から、この10年ほどの台湾文学研究の進展について述べてきた。今日、改めて10年前を振り返ってみると、その変化の大きさに驚かされる。だが、これ以後の10年間に、台湾文学研究がどのようなものになっていくのか。また、私自身はどのような研究が可能なのか、全く見当もつかないというのが実感である。

台湾（文学）研究は、いまや台湾において「顕学」となり、多くの研究機関に潤沢な資金や人材が投下される国家的なプロジェクトとなった。それと比べて日本の研究状況は、絶望的なまでに暗い。日常的な研究費の減額に苦しみ、増え続ける大学行政に忙殺されながら、家内制手工業的な研究を強いられている日本の研究者は、どうすれば研究上の「発言権」を僅かながらも確保しうるのだろうか？

もちろん私に妙案などない。ただ私が個人的に自戒しているのは、植民地時代の台湾文学を研究対象とする「日本人」-自らが望んだわけではないにせよ、「帝国の末裔」のひとりである-として、そのポジションには意識的でありたいということだ。すでに紹介したように、台湾では今なお「皇民文学」をめぐって激しい議論が引き起こされるように、「後殖民」の問題は、いまだ決着をみていない。そして戦後60年が過ぎたとはいえ、日本の脱帝国という課題が完遂されたわけではない。

「帝国の末裔」の一員として、植民地の「言葉のアヤ」を研究すること。「これからの10年」間、私はこうした自らのポジションを意識しながら、なんとか研究を継続したいと願っている。

注

1 呂興昌・陳萬益（中島利郎訳）「刊行によせて「悲情」から「落實」へ」（下村作次郎・中島利郎・藤井省

-
- 三・黄英哲編『よみがえる台湾文学 日本統治期の作家と作品』東方書店、1995年
 - 2 黄美娥「台湾文学学科知識的の境界在哪里？」（『文訊』265号、2007年）
 - 3 呉文星「談台湾文史語言系所之現況與改進之道」（『文訊』265号、2007年）
 - 4 1990年代の台湾文学の研究動向に関して、筆者は「日本統治期台湾文学研究の現状—一九九〇年代をふりかえって」（『朱夏』17号、2002年）で概括したことがある。戦後の中国・台湾・日本における台湾文学研究については、星名宏修「現代中国文学研究における台湾文学研究」（『立命館言語文化研究』13巻3号、2001年）も参照。
 - 5 下村作次郎「戦後日本における台湾文学関係研究文献目録」（中島利郎・河原功・下村作次郎・黄英哲編『日本統治期台湾文学研究文献目録』、緑蔭書房、2000年）
 - 6 呂興昌・陳萬益（中島利郎訳）「刊行によせて「悲情」から「落實」へ」（下村作次郎・中島利郎・藤井省三・黄英哲編『よみがえる台湾文学 日本統治期の作家と作品』東方書店、1995年）
 - 7 同上
 - 8 会議の様子は、河原功による「学会・シンポジウム参加記「近代日本と台湾」シンポジウム」（『日本台湾学会ニュースレター』第2号、1999年）が詳しい。
 - 9 陳映真「精神的の荒蕪—張良沢皇民文学論的の批評」（『人間 思想與創作叢刊 台湾郷土文学・皇民文学的の清理與批判』台湾・人間出版社、1998年）
 - 10 黄美娥、前掲論文1
 - 11 「跨領域」だけでなく、「跨文化」を掲げたシンポジウムも2006年に台湾で開催された。清華大学主催の「台湾文学與跨文化流動—第5屆東亞学者現代中文文学國際學術研討会」である。会議の成果は、邱貴芬・柳書琴編『台湾文学跨文化流動《東亞現代中文文学國際學報》第三期 台湾号』（台湾・国立清華大学台湾文学研究所、2007年）を参照。
 - 12 国立成功大学台湾文学系編『跨領域的の台湾文学研究學術研討会論文集』（台湾・国家台湾文学館、2006年）
 - 13 陳萬益「台湾文学系所十年省思」（『文訊』265号、2007年）
 - 14 中島利郎編『『台湾時報』総目録』（緑蔭書房、1997年）

